

あっぱれ! 水の動物たち

今日から始まる新シリーズは神戸市立須磨海浜水族園園長・亀崎直樹さんが海の生き物の魅力や生態を見つめるエッセーです。亀崎さんは沖縄県八重山諸島などでウミガメなどを研究してきた海洋生物の専門家。海の生き物を通して見えてくる人間の生き方まで語ってもらいます。

イルカの行動

須磨海浜水族園には9頭のイルカがいます。全部、バンドウイルカと呼ばれる種で、世界中の比較的暖かい海にすんでいます。体色は全身灰色で美しくもありません。顔ものっぺりしていて、何の変哲もない容姿です。ところが、皆さんからはかわいいと親しまれ、水族園で一番の人気者です。なぜ、イルカはかわいいのでしょうか。そして、人気があるのでしょうか。

イルカの知能は高いと言われます。昔の本には、脳は人間よりも大きく、しわも多いのでかしこいと書かれていた記憶があります。ところが、「かしこさ」とか「知能」というのはどのような能力なのでしょう。子どもを持つ親にとっては、我が子の「かしこさ」は実に気になる問題です。私たちが何となく意識している「かしこさ」には大きく二つの意味があります。「記憶力が高い」というかしこさと、「予想する能力が高い」というかしこさです。前者は学習能力というもので、後者は知能です。学習と知能の違いは、学習は経験したことを繰り返すことで、知能は経験していないことを予測することです。



高い知能 遊びで発揮

例えば、水族園の魚は飼育係が近づくと水面まで上がってきますが、これは何度も餌を飼育係からもらうことで学習したことです。イルカもジャンプを披露してくれますが、これも学習の成果です。知能が高いことにはなりません。

イルカの知能の高さをみることができるのは、ショーとショーの合間です。私たちからみれば、イルカの休憩時間のようなものですが、イルカにとっては一日の多くを占める大切な時間です。その時こそ、イルカの知能の高さを垣間見ることができます。自由時間のイルカはさまざまな行動をします。ボールを与えると遊びます。時には、ボールをプールの外に放り出し、人間がまた放り込んでくれるのを待っているような態度さえとります。また、長さ1メートルのホースの切れ端を与えると、2頭のイルカが両端をくわえて泳ぐこともありました。ホースは水の力でブルブル震えるのですが、まるでその振動を楽しんでいるようなのです。

これらの行動は、明らかに学習行動ではなく、新たな遊びを自ら考え出して行う行動なのです。これが知能なのです。私はカメの研究をしているのですが、ボールで遊ぶカメを知りません。仲間とじゃれ合うカメも知りません。魚でも、繁殖行動や闘争を除くと、2匹で遊ぶことはありません。



①1頭のイルカがショーでもないのでデッキに上がった。それを見かねたように別のイルカがちょっかいをかける。こんなところにイルカの遊びを見ることのできる②2頭のイルカが人に興味を持ってガラス面に近づいてきた。イルカはガラスの向こうにいる人に興味を持ち、また、イルカ同士、何らかのコミュニケーションをしているに違いない
〓いずれも神戸市立須磨海浜水族園提供

そうです。知能的な行動の典型は遊ぶことなのです。「積み木」という玩具があります。何か手本があって、その通りに積み木を積むことは学習的です。でも、勝手に積み木で何かを作ることは、知能的です。人間にとって大切なことはどちらでしょうか。両方とも大切なことではあると思いますが、生き抜いて行くにはやはり知能がないとだめでしょう。人はイルカに感じることでできる知能に共感をもつことで、あののっぺらな顔をしたイルカをかわいいと思うのかもしれない。つまり、イルカのかawaiiさは主に行動、つまり「しぐさ」からくるものなのです。

いかがでしょうか。今度の休みにはイルカの遊びをみて、ご自分の子どもの遊ばせ方を考えてみれば…。

二次回は30日

かめゆき・なおき 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員准教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。主著は「イルカとウミガメ」(岩波書店)、「現代

を生きるための生物学の基礎(化学同人)など。

